

長期戦に對する國民の覺悟

緒言

支那事變勃發以來過去八ヶ月に亘り帝國は膺懲の師を進めて赫々の威武を揮び、遂に首都南京をも攻略して抗日支那に對し徹底的の打撃を與ふると共に、東方國民政府の反省を促したのであるが、彼等は遂に我が眞意を解するに至らざるのみならず、人道の公敵たる共産分子を要路に用ひて蘇聯邦と親しみ、更に英國其の他列強の干渉乃至は援助を頼んで飽くまでも長期抗戰の自棄的態度に出でつゝある。この中長期間をこらるる共産分子の活動は、殊に於て帝國政府は、爾後國民政府を對手とせざる眞に提携するに足る新

長期戦に對する國民の覺悟

1279

0881

興業那政權の成立發展を期待し、之と兩國國交を調整して更生新支那の建設に協力せんとするものなることを中外に闡明すると共に、愈々長期戦に對處する本格的の持久態勢を整ふることをなす。此の間に、我が國は、
 従つて徒らに長期抗戦を呼號して民生の窮迫を顧みず、赤化の魔手に翻弄されつゝ、東亞全局の和平を攪亂しつゝ、ある暴戾政權に對しては、飽くまでも膺懲の手段を盡し、徹底的に之が潰滅を期すると共に、一力之に伴つて愈々加重し來るべき難局に對しては、適確の認識を以て萬違算なき對策を講じ、以て東亞永遠の平和確立に向つて堅忍持久舉國一致の邁進を續けねばならぬ。
 事態悪化して遂に茲に至れるは寔に遺憾のことであるが、是に本事業が本來長期戦に移行すべき必然の素因を内包しあればこそ、今日迄我が國があらゆる努力を致せるに拘らず遂に來るべき所へ來たものと謂はねばなら

惟ふに本事變はその由來するところ遠く、實に支那十數年來の極端なる抗日政策と、その背後にあつて之を助長支援する關係にありし歐米列強の動向並に國際共產黨の策動等に因由するものなることは既に屢々説かれて來たところであるが、更に東亞全局に亘る今日の事態は遠く日清、日露兩役の頃より連續して逐次醞釀せられて來たもので、而もその間世界列強の勢力と利害とが錯綜拮抗せる情勢下に、支那は巧みに以夷制夷の政策を用ひて當面を糊塗しつゝ、今日に及んだのである。

斯かる深刻複雑なる事情の下に勃發した支那事變は、素より一朝一夕に解決し、或は單に軍事的勝利のみを以て終局に至るべき性質のものではなく、必ずや東亞を繞る國際全般の關係より、國家百年の大計に基づいて永久的に

長期戦に對する國民の覺悟

三

1281

1281

對處せねばならぬ回天の大業であつて、遠くは日清、日露の兩戰役、近くは滿洲事變をも包括しての總決算を爲すべき重大時機であり、東亞は勿論のこと延いては全世界を國際正義、共存共榮の正道に復歸せしむべき一大轉機とも謂ふべきである。

斯くて東亞和平に對し、帝國の責任と使命とは愈々重大を加へ、躍進途上にある帝國が當然克服すべき難局も益々増加し、支那事變は茲に日支兩國抗爭の域を脱して深刻廣汎なる世界的意義を有つ第二の段階に入つたのである。従つて帝國は、事變の將來に對し、單に武力戰を以て之に對するのみならず、前之を中心として政治、經濟、思想、外交等の各部門に互り眞に國家總力を發揮し得る如く、國家の總力就中國防力の急速なる培養整備を

促進し、而も諸事悉く戦争激烈の間に處する熱意と速度とを以て革新的措置を必須とするのである。

今や日露戦後第三十三回の陸軍記念日を迎ふるに當り、過去の諸戦役に於ける先人の偉業と苦難とを想へば、帝國が今日東亞の安定勢力として一層大なる發展途上に於ける試練と、且又回天の聖業の前途に横たはる難關とに直面せることも敢て憂ふるに足らず、寧ろ聖代に生くるもの、光榮として一層勇奮すべきである。

願みるに日露戦役は日本が東洋の平和と帝國の安全とを確保する爲に、横暴極まりなき露國に對し、國運を賭して當つた乾坤一擲の聖戦であつて、當時の國情よりして、此の大戦に對する國內朝野を擧げての決意は極めて悲壯痛烈なるものがあり、その舉國一致、必死奮戦の意氣は正に今日の事態に於

長期戦に對する國民の覺悟

五

1283

1851

で我等の以て範とすべきところである。

明治三十八年十月二十四日、當時の滿洲軍總司令官大山元帥の下した左記訓示は、實に三十三年後の今日の事態を豫言し、單に當時のみならず、現在及將來に對しても不朽の教訓を垂れられたるものと謂ふべきである。

「惟フニ極東ニ發生スベキ事件ノ將來益々深ク列國ノ注視スル所トナルベシ、此間ニ處シテ本戰役ヨリ得タル戰勝ノ光輝ヲ失墜セズ更ニ國威ヲ發揚シ國力ヲ増進センニハ勢ヒ帝國軍ノ整備ト充實ヲ必要トスベク、此ニ於テカ吾人ノ任務ハ一層ヲ重キヲ加フルモノト云フベシ」

乃ちこゝに日露戰役の當時を偲びつゝ、長期戰の第二段階に移れる事變の實情と意義とを明かにして、以て國民の覺悟に資せんとするものである。

二 日露戰役當時を偲ぶ

884

1284